

社会参加

平和な世を願って

平成二十(二〇〇八)年から、親鸞聖人の「世の中安穩^{あんのん}なれ、仏法ひろまれ」の願いにお応えしていこうと、終戦記念日の八月十五日に、読経・焼香のあと、正午のサイレンとともに、「平和への願い」をこめて、東別院の梵鐘を撞いています。



平和の鐘を撞こう

藤谷純子

昨年八月に婦人会で「戦争ホーキ(放棄)」を作ったことが発端となって、私の中にしずかな平和運動への願いが芽生えました。しずかなというのは、日々の实际生活を見てみると、とても平和(平等と和睦)を願って生きていない自分に対面せざるを得ないからです。やっぱり自分が、我が家が、我が町が、我が国が、という利己心をどこまで超えるのか、それを明らかにしてゆく歩みを、しずかな平和運動と言ったのです。

聖徳太子の十七条の憲法には、第一条に「和(やわ)らかなるをもつて貴(たつと)しとし、

「世の中安穩^{あんのん}なれ
仏法ひろまれ」
(親鸞聖人)
=平和への祈りを鐘の音に!=
2008年8月15日正午より
東別院の梵鐘をつきに
おいで下さい。



忤(さから)うることを宗(むね)とせよ」とあり、第二条には「あつく三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり」とあり、平和な世界は仏・法・僧を敬う心から開けると明示してあります。ここに日本人を貫いている平和を願う心があります。これが私たちが帰るべき「初心」であり「真実の心」ではないでしょうか。私たちはこの「帰依三宝の心」を「お念仏申す心」として賜っています。ここに、たえず利己心をこえて、自利と利他の矛盾しない平和への原点、原動力があると思います。そしてこれから毎年、八月十五日の終戦記念日がずっと終戦記念日であるように、私たちの平和への祈りを(別院の)梵鐘^{ぼんしょう}の音色に託してゆきたいと思います。お浄土では、小鳥の声も木々のさやぎも楽器の音色も、私たちに念仏念法念僧の心を起こさせると説かれています。そのように、この梵鐘の響きは、私たちのいのちの深みにナムアミダ仏と浸み込んで、ナムアミダ仏と申さしめ、平和を願う心と呼びさします不思議なはたらきをして下さるでしょう。本年も八月十五日正午、お念仏申しつつ鐘の音を響かせましょう。

(「響流」71号)



平和への祈りをこめて

「戦争ホーキ」を作りに続けています

平成十九（二〇〇七）年、婦人会でご本山にお参りした折、高橋法信先生から「お母さん、自分の子供を戦争に送り出せますか？」と問われました。勝福寺に帰ってから皆で話しあい、坊守の提案で「戦争ホーキ」を作りました。できあがった「戦争ホーキ」は、八月六日の平和学習の日に、近くの小学校に貰ってもらいました。

その後、原発事故があり、今は「戦争ホーキ・原発ホーキ」として、毎年婦人会（かはづの会）の活動として作り続けています。

今年も「戦争ホーキ・原発ホーキ」を作りました

釋尼信知（松本千代）

七十三回目の終戦記念日がやってきました。戦後生まれの人が多くなり、平和しか知らない人にとって、「終戦記念日って何？」「八月十五日ってお盆の最後の日」、としか思えないのではないのでしょうか？

でも世界では今も戦争が、各地で行われ、テ

ロも多発状態です。戦いの犠牲者となるのは、何の罪もない女の人や子供たちではないでしょうか？「自分たちの国さえよければ良い。自分さえよければ良い」のエゴで戦争を繰り返す、こんな世の中続けていて良いのでしょうか？

そこで私たち勝福寺婦人会では、世の中から戦争は無くなってほしいの願いのもと「戦争放棄（ホーキ）」その後、「原発放棄（ホーキ）」も加えた物を十年前より作り続けています。

材料は蚕の絹を主につまようじ等で作ります。絹は後藤あやめさんの寄付です。本年度は二日間で二七〇個有志の人十名ぐらいで作りました。私は戦争を知らない世代ですが、父たちの話を聞いたりする中で、絶対戦争など行っていないと思います。

私の子供達や孫達には、人と人の殺し合いなんてしてほしくないと思います。正しい戦争なんてありえないと私は、思います。

（「ひびき」91号）



アフガニスタン
WARではなく
WATERを



中村哲医師講演会in大分

日時：2017 8月20日（日）
【開演】午後1時30分
【開演】午後3時～4時30分まで
講師：中村 哲 音楽ゲスト：ウイステリア・ユール/スティーヴン 宮川誠二
会場：ホルトホール大分 大ホール 【入場料】一般/500円 高齢者/300円 小児/100円

福岡出身で一九八四年からパキスタンで医療活動を始め、八九年からはアフガニスタンにも活動を広げ、現在は医療だけでなく、農村復興のため、大がかりな水利事業に携わっている中村哲医師の講演会「アフガニスタンWARではなくWATER」が、八月二十日大分市で行われました。

この会場に集まった方々に世界中が戦争や紛争を放棄して平和になる事を祈って、婦人会が作った「戦争ホーキ」二〇〇本を配りました。

（「ひびき」87号）



福島の人々と共に

東北沖を震源とする千年に一度の大地震が起き、その巨大な津波で多くの犠牲者が出ました。また、福島第一原発が次々とメルトダウンし、東北の地が放射能に汚染されてしまいました。

津波ですべてを流された人々には、掌を
合わすお念珠さえないのでなかうかと案
じ、「被災地の方々へ腕輪念珠をお送りし
よう」と呼びかけたところ、多くの方がメッ
セージを添えてカンパをお寄せ下さりまし

被害者の苦悩に

岸田トヨ子 99才
『くしげないせ』の作者の処女作集

皆様の心の平は、今も平癒がきて
 傷痕が、うに、深くなつてゐると思ひます
 その傷痕に、薬を塗つてあげたい
 人、誰しもの心、持ちこたへず
 私をむかふことは、ないだらうかと、考へます
 もうすぐ、白雲になる、新
 天國に行く日も近い、いひしう
 と、時は、陽射しとなり
 まよ風になつて、皆様を心癒します
 これが、ま、目と、笑ひ、わしうが
 朝は、かなうず、やうてきます
 こじけなひいひ！

た。おかげさまで宮城、福島、岩手の大谷派のお寺を通して一一四〇個の念珠をお送りすることが出来ました。有り難うございました。

(「響流」74号)

つながうゝ！ 被災地の人と

今日の新聞に、こんな記事を見つりました。
一つは、音が吹きつりゝがれゝと化した家々を
まわつて、今日堂し、紙と鳴うし、お話をあけ
てゐる若い僧侶の姿。
もう一つは、99才にならぬ婆やさんが、被災者の人々
を見つりゝしつかりとしたやさしい眼差しと
こん復の詩。

私達にも何かをさることはなうらうか
親をなくした子供たち、子や孫に死なれた
老人たち、家と失う人々、船を失くし海と
失つた漁師の人々、そして町屋裏の方、酷
寒の原野、炉の傍にいては冷たい空の方と

「疲れた時、さびしい時、苦しい時は、仏様の
ふところにおかれて、休んで下さい。」
そして、ま
少しずつ、まきはじめて下さい。そんなマッセージ
をとると、腕輪と珠を送つたやうな感じが
お賛同下さる方は、用表（手紙）の紙に
マッセージ（お前を、これお記して下さい。）を
書いて下さい。お念珠代として、お金
をつけておあげて下さい。うれしいです。

大分県 山手佐市四日市 勝福寺



ゆふわく

二〇一一年三月十一日に起こった東日本大震災に伴う原発事故により、福島の子ども達は被曝の危険性にさらされ、屋外での活動までもが制限されました。それに胸を痛めた人々が、全国各地で、夏休み期間中、子どもたちを地元で招待する保養運動がおこりました。

大分でも、湯布院でゆっくり保養してもらおうと、有志の者で「ゆふわく実行委員会」を立ち上げました。勝福寺からは松本順さんと岡本朋之さんと住職が、それに安養寺の林貴子さんが実行委員会に入り、県内各地の様々な分野の人々と力を合わせて、毎年三〇名前後の親子を大分に招待してきました。

「ゆふわく」の主会場は、二〇一一年から二〇一五年まで湯布院の見成寺さん。二〇一六年は熊本・大分地震のため中止。二〇一七年は津久見の蓮照寺さんでした。

勝福寺では毎回、皆さんから五〇万円近くのカンパをいただき、宇佐組の方々と食事作りもしてきました。

なお「ゆふわく」は原発事故から時間も経ち、緊急避難的な意味での保養の要望が減ったこともあり、活動を終了しました。

二〇一七年「ゆふわく・津久見」

松本 順（大塚）

この取り組みは、福島第一原発のメルトダウン事故により、放射能の問題で遊ぶことも出来ない子供たちに、屋外で思い切り遊んでもらおうと発足しました。今回は、会場を湯布院から津久見の蓮照寺に移し、福島県の親子二十二名を、七月二十三日～七月二十九日までの七日間招待しました。

弁護士・住職・坊主・県議・市議・会社員・主婦など二十一名で構成された実行委員会のメンバーと、会場となった津久見の蓮照寺のご門徒や地域の方々と、それにカンパを寄せてくださった多くの皆さまの力が一つになって

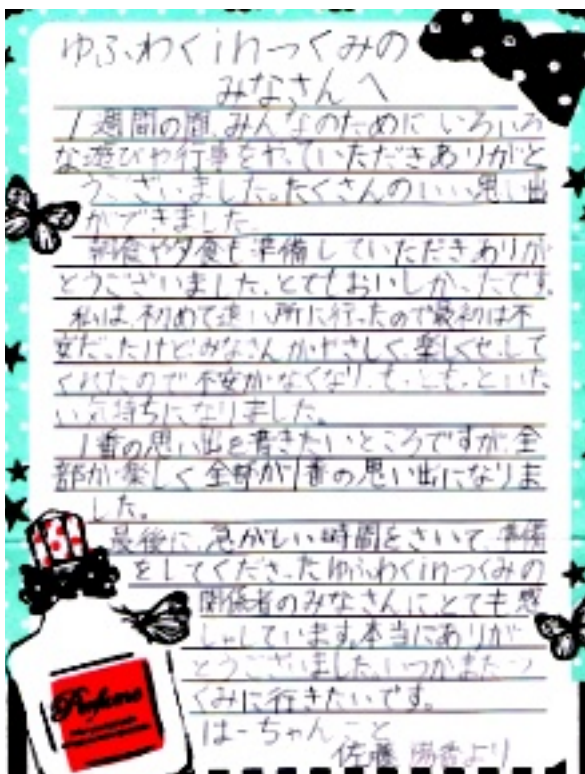
「ゆふわく in 津久見」が実現できました。

今回、私は全日程に参加しました。福島まで迎えに行き、新幹線、サンフラワーで別府に到着。初日は湯布院散策、二日目は保戸島へ。保戸島空襲慰霊祭に参加後、海遊び。三日目はそうめん流しや臼杵の町歩き。四日目は午前中、魚釣り。午後は太平洋セメントの採掘場。夜のお別れ会では、たこ焼き・焼きそば・かき氷・串焼き・マグロのおさしみの屋台に、ヨーヨー釣り、花火などで最後の夜を楽しみました。

七月二十八日、いよいよ最後の日。別府の地獄めぐり、昼食に九州ラーメン、「うみたまご」でイルカショーを見、別府国際観光港に到着後、記念撮影をした頃より子供達が「帰りたくない」と泣き始めました。

今回、お迎えから見送りまで生活を共にして感じたことは、子供は思いがけない発想をすること、ちゃんと自己主張の調整ができること。また、人間一人では何もできないけど、色々な能力を持った人達に支えられて生きている事を痛感致しました。

帰りの船に乗った時、子供たちは涙、涙の連続でした。参加した子供や保護者からのお礼の手紙に、僕は将来、大分に住むとか、帰りたくなかったとか、子供が一回り大きくなったとか書かれていて、私も涙を流しながら手紙を読ませて頂きました。（「ひびき」87号）



忘れな鐘

東日本大震災が起きてから三年が経ちました。

この三年という時間を被災地の人達は失った故郷の家や町を思い、そしてまた、大切な人との死別の苦しみを抱きつつ、長い長い時として生きてきたのではないのでしょうか。

私たちはともすれば忘れて暮らしていますから、3・11は、多くの生きとし生くるものと共にこの地球に、この国に生きることを問い直す日として、「忘れな（勿忘）の鐘」を撞く集い

をしました。一時半より本堂にて被災地の今のビデオを見たり、美しい衣装を着けた「花は咲く」のフラダンスを見せていただきました。私も福島島の坊守さんから教えていただいた「花は咲く」をみんなと踊りました。

二〇一四年午後二時四十六分に四日市別院の鐘楼にて、それぞれ復興を念じ、恐ろしい原発の廃止を祈って鐘を撞きました。鐘の響きは、福島からおいでた二人の坊守さんの「私たちのことを忘れないでください！」と訴えた声となって聞こえてきました。

（響流「77号」）

二〇一一年三月十一日 あれから八年
今年も「忘れな鐘」を撞きました

私たちは、年月が経つうちに、何事もなかったかのような日暮らしをしています。だからこそ、三月十一日のことは胸に刻み、大事にしていかなければならないと思うのです。

今年も、三月十一日の午後、勝福寺の本堂に集まり、亡くなっ

た多くの命を追悼して読経と焼香をしました。続いて、

四日市別院の鐘楼に移動し、十四時四十六分のサイレンとともに一人ずつ「忘れな（勿忘）の鐘」を撞きました。

その後、本堂に

戻りNHKテレビで放送された「黒い津波」を見ました。

湾内に蓄積していたヘドロが津波によって巻き上げられ、真っ黒な津波が人々を襲っていく姿は水俣病を連想させるものでした。原発事故という黒い津波といい、大地からしつぱ返しを受けていることを思い知らされました。

（「ひびき」93号・二〇一九年）

忘れな（勿忘）の鐘
を撞く集いへ

3月11日 13:30 ~

勝福寺本堂にて
「被災地の今」ビデオ
「花は咲く」歌と踊りと手話

14:46 ~

忘れな鐘をつく

被災から3年がたちます。
故郷をうしなした人々、大切な人々を
うしなした人々、……この地球に生きる
こと、この国に生きることを向かわる日
を迎えます。どうぞ お集り下さい。

また
仏さまの大悲心のひびきを
共に聞きましょう！ 響流山 勝福寺



熊本地震被災地支援

「炊き出しボランティア」

二〇一六年四月十四日には熊本・大分地震がおこり、熊本県は勿論、大分県でも湯布院や別府で甚大な被害を受けました。

宇佐組では勝福寺を中心に有志の者で特に被害が甚大だった熊本の支援を三回行いました。

第一回 熊本地震被災地支援

宇佐組有志・炊き出し報告

村田 風

今回炊き出しをするのにあたり、熊本で炊き出しをしている方から、みんなコンビニのおにぎりなどの冷たいものばかり食べていて温かいものが食べたい、というお話をいただきました。そして、あちらからの要望で夕食としてだんご汁を作ることに決定！それもなんと四〇〇食分！

七月二日、熊本へ向かう前日、炊き出しへの前準備が始まりました。大根やかぼちゃ、ごぼう、ネギ、干し椎茸、人参、などなど。野菜の他、当日必要な材料や道具などの荷造りと、



だんご汁の要となるだんご作りに追われました。

七月三日、いよいよ当日、荷物を大きなトラックに詰め込んでいざ熊本へ出発！

熊本まで三時

間。着いた先は、

専福寺というお

寺。その住職

の内古閑さんは

地震から幾度も

炊き出しなどの支援を続けてこられている方です。

四、五人で一千食分の炊き出しをしているというお話も聞いて驚きました。専福寺さんの

境内で通り雨がある中、みんな

でテントの下でひたすらに野菜

を切っていくま

した。

炊き出しの場

所は益城町の隣

にあたる熊本市

東区にある秋津

校区第一公民館

というところで

す。内古閑さん

がその付近の住宅地を車でぐるっと案内して見せてくれました。そこで見た光景はテレビで見



がその付近の住宅地を車でぐるっと案内して見せてくれました。そこで見た光景はテレビで見えるような被災地そのものではあったのですが、やはりこの自分の目で間近に見るのとは全く印象が変わりました。そこにはまるで嘘のように無残に崩れてしまっている家から、見た目は普通に見えても家の芯が傾いていることからこれから住むには危険と判断されている家や様々です。

それまで炊き出しに出向くということがどういうことであるのか、そのだんご汁がどのような暮らしをしている方々に届くのか、想像もできずにいたのです。しかし、今から作るだんご汁は、崩れた家の前に建ったプレハブで暮らす方々が来られるということや、まだまだ多くの方がプレハブでもなく、テント暮らしをする人もいれば、車中泊して暮らしている方がいるということを目の当たりにして、やっと自分のこととしてどれだけ大変なことだろうと想像をするに至ったのです。

そうして案内していただいたあと、だんご汁



作りに取りかかり始めました。大きな釜や寸胴にどんどん野菜を煮詰めていきます。十八時から支給を開始ということに決まっていたのですが、なんとその一時間も前からどんどん人がやってきて列を作って待っているのです。その間、松本一家が用意していった七夕の竹に願いを書いてももらったり、蚊取り線香をお土産にももらいました。あと藤谷信さんと私の太鼓とギターの演奏もしました。皆さんのやさしい顔にこちらが元気をいただいたように思います。だんご汁は十八時から三十分の間に並んでいる人みんなに行き渡り、終了ということになりました。幸い大きなハブニングもなく、無事に終えることができました。

四百人分のだんご汁

蚊取り線香・フマキラーを二百缶配布
寄せられたカンパ二五五、四九九円

第二回 熊本地震被災地支援

宇佐組有志炊き出し報告

村田 風

今回、炊き出しをした場所は、前回に続いて同じ場所でもある、熊本市東区の秋津第一公民館というところです。

炊き出しに来られる方々の多くは家が半壊に近い状態で、家の近くに新しく家を建てておられる方やプレハブに住まれている方、仮設住宅

の方など、その家それぞれの状況によって暮らしの程度に違いが見えてきたそうです。それは熊本全体から見るとよりはつきりしてきているそうです。震災の被害に直接遭っていない地区からしたらもう過ぎたことにもなっているし、まだまだ色濃く被害が残っている地区と、その場所やその家族の状況によっても抱えている問題の内容が異なり、その支援の仕方も難しいそうです。

熊本でお世話になっていいる専福寺の内古閑さんは、仲間と共にもう百回以上も炊き出しを行ってきている方です。「炊き出しを行うことで、そのの皆さんが隣近所との関わりやつながりを持つきっかけにつながってくれたら嬉しいし、その場でカフェを開いたり、みんな苦しいこともあるけど、被災者とは言っても、もちろん日々の暮らしの中で楽しみはあって、人と出遇い、話して笑いあう、そういう関係を持てたら嬉しい、だから炊き出しを続けています」とお話してくださいました。

そうしたお話を聞いたので、サロンを一時間ほど開きました。区長さんが事前にビラを配ってくださったこともあり、子どもも多く



来てくれ、みんなで笑い、楽しく過ごす時間となりました！ 子どもたちはやはりマジックショーが一番人気だったようで、大変盛り上がりました。

そして最後にはなりましたが、肉じゃがの炊き出しについての報告をさせていただきます。本日に申し訳ないのですが、肉じゃがを前日に作り熊本に持って行ったものの、熊本に着いて開いてみると肉じゃがはすっぱい臭いがして少し傷み始めてしまっていました。私たちとしても非常に残念でならないのですが、結局、肉じゃがを出すことは断念し、チーム熊本の臨機な対応に助けられ、急遽おでんを出すこととなりました。

肉じゃがを提供するにあたって、思いもよらないことになってしまいました。しかし、現地の方々には、サロンやおでんを提供でき、また、岡本康さんから柿と大久保さんのみかんと川面英子さんからの乾パンなどのおみやげを持って帰ってもらい、喜んで頂きました。今回の炊き出しのサポートをしていただいた皆さんのおかげで温かな時間をもつことができました。



ミンダナオ子ども図書館 交流事業

第一回 二〇一七年四月三〇日

フィリピンのミンダナオ島で、戦争や家庭崩壊のため身寄りが無くなった子ども達を引き取り、生活の支援を行う「ミンダナオ子ども図書館」を主催している松居友さんと、施設で共同生活をしている青年たち十四名が支援者から招待されて来日しました。彼らは日本の子どもや青少年たちと交流するため一ヶ月ほど各地をまわっています。

ここ勝福寺にも四月三十日に寄つてくれました。本堂で彼らが披露してくれた収穫の喜びを表す民族ダンスやスピーチには、想像を絶する苦労を重ねてきたにもかかわらず、明るく、生きる力が満ち溢れていました。その姿は本堂に集まったたくさんの観客に感動を与えてくれま



した。彼らのうち四名の感想です。

ノルハイヤ（女性 19歳）

日本に来ることができてとっても嬉しいです。日本に来ることは、私の夢の一つでした。みなさんに会えて本当に嬉しいです。

ジョバリン（女性 17歳）

毎日が充実しています。そして、すべてのことに感謝でいっぱいです。日本の人々に会って新しい友達をつくるのが私の夢の一つでした。私を支援して下さっている方にも会えて本当に嬉しいです。

ウォルター（男性 18歳）

兄弟、姉妹のようにうちとけ合い、ひとつになれて、とても幸せな時間でした。ぼくはこの思い出を大切にします。みなさんもそうだといいな。幸せにしてくれてありがとう。

クラウティン（女性 18歳）

民族ダンスのメンバーに選ばれ、日本に来て感謝でいっぱいです。みなさんのあたたかいおもてなし、本当にうれしかったです。

＊日本の子どもたちには滅多に見られない「いきいきとした目の輝き」にドキドキしました。物やお金が溢れていても心は貧困に見える日本はこれでもいいのか、考えさせられました。

（「ひびき」86号）

第二回 二〇一八年四月二五日

第一部・松居友さん講演

「ミンダナオの子ども、日本の子ども 生きる力って何だろう」と題して、松居友さんが、テレビ放映されたビデオ（『なぜここに日本人―マノボ族の酋長になった日本人―』）を見ながら、お話をしてくれました。友さんは子どもたちの父親のようですし、子どもたちの人懐っこさ、キラキラした生活に感動しました。



第二部・ミンダナオの歌と踊り

民族衣装は、あでやかできらびやか。伝統の歌と踊りはテンポよく、竹を使った踊りには足がはさまれないようにとヒヤヒヤ、楽しい一時を過ごしました。



第三部・交流会

夜はカレー（豚肉系は一切ダメ）とサラダを中心にした料理。ミシダナオの子供たちは、魚と鶏肉の料理を作ってくれました。

先住民族、イスラム、クリスチャンと宗教は違っても大変仲の良い子どもたちです。お互いの宗教を尊重しあっている姿が垣間見えました。



古着などミシダナオに送りました

子ども図書館に送る、古着・靴・鞆・おもちゃ・ぬいぐるみ等も、たくさん寄付して下さいました。勝福寺の一部屋が品物で埋まり、通れなくなるほどで、大きな段ボールで12個にもなりました。

これを機会にミシダナオの子ども図書館に寄り添っていきたく思っています。これからも、皆さまのご協力をお願いします。



第三回 二〇一九年五月二日 奨学生たちの日本公演に同行して

現地スタッフ 宮本 梓

昨日は豊前の法覺寺と宇佐の勝福寺で公演をしました。奨学生の日本公演は三年目ですが、勝福寺さんは、来日公演の一年目から毎年、奨学生を招いてくださっています。：

夕食をごちそうしてくださり、まるで家族のように私たちをお迎えしてくださいました。

勝福寺で里子支援をして下さっている方から、「私の支援している子どもたちへ」と、奨学生の宛名が書かれたプレゼントを預かりました。：

これで、奨学生のバイリンやマリセルに「私を学校に行かせてくれたのは、どんな人？」と聞かれたときに、教えてあげることができます。

（「ミシダナオの風」71号から）



広報事業

「響流」 こうる

昭和六十三年、住職就任を機に、勝福寺の活動を伝え、教えを共に学ぶために、機関誌「響流」の発行を始めました。

表紙には、ご門徒さんに書いてもらった法語と、ご門徒のお子さんの絵を載せさせてもらいました。第一号は、書は渡辺信雄さん、絵は院内北部小一年生のまどばきようこさん、でした。「響流」には、法要の際のご法話要旨、それに子供会や婦人会、報恩講などのお寺の行事、研修旅行、上山奉仕、等々の報告や参加者の感想等がのせられています。

今回の『響流山勝福寺―その歴史と歩み―』には「響流」の原稿がたくさん入っています。

ところで、「響流」の発行を年度別に調べてみると、

一九八八年	1 ～ 4号
一九八九年	5 ～ 14号
一九九〇年	15 ～ 21号
一九九一年	22 ～ 26号

なつかしき「響流」第1号



題字の「響流」は前住職に書いてもらいました。

一九九二年	27 ～ 30号
一九九三年	31 ～ 34号
一九九四年	35号
一九九五年	36号
一九九六年	37号
一九九七年	38 ～ 46号
一九九八年	47 ～ 52号
一九九九年	53 ～ 59号
二〇〇〇年	60 ～ 62号
二〇〇一年～二〇一四年	63号～76号
二〇一五年	77・78号

となっていました。

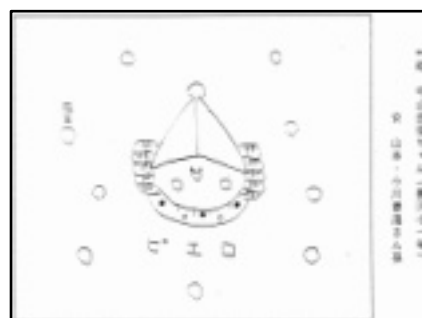
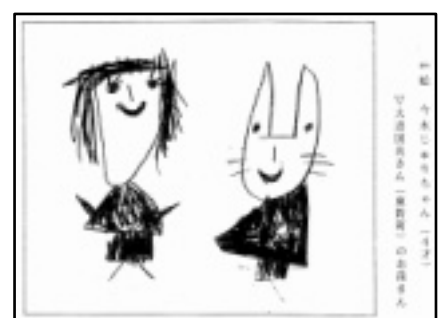
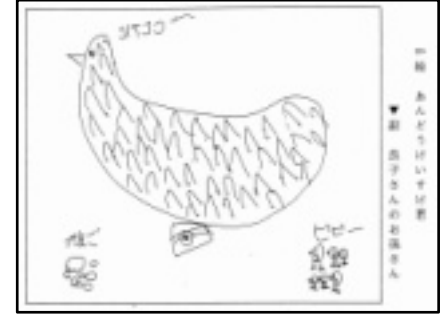
はじめの頃は一生懸命に出しておりますが、二〇〇一年から二〇一四年にかけては、年賀号だけになり、一年間の歩みをまとめて報告しています。

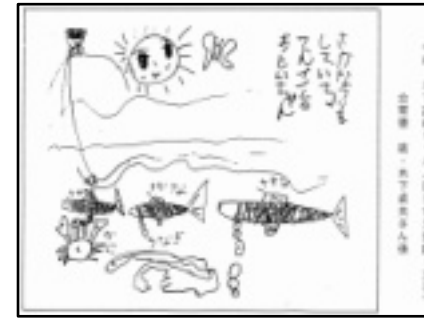
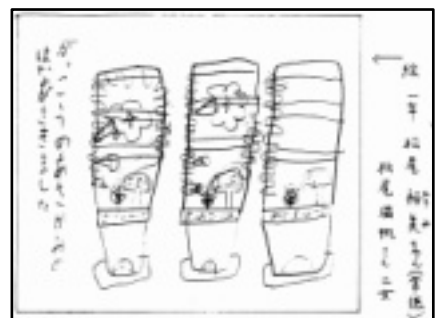
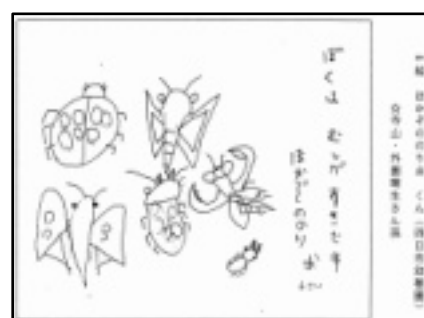
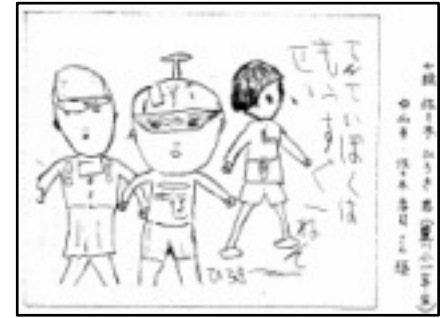
住職が怠けたということもありますが、すべて一人でしていたことが、つい怠けてしまう要因になったと思います。こうした反省から二〇一五年に寺報のための編集委員会を作り、再出発することになりました。

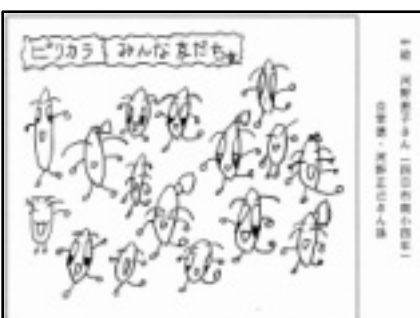
次頁から「響流」の表紙を飾った子どもたちの絵と、法語を書いてもらったご門徒の皆さんの書(字)を載せておきます。



「響流」の表紙を飾ってくれた子どもたちの絵です。この絵を描いてもらってから何年も経ちます。今はどこで、どんな生活をしているのでしょうか？







主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



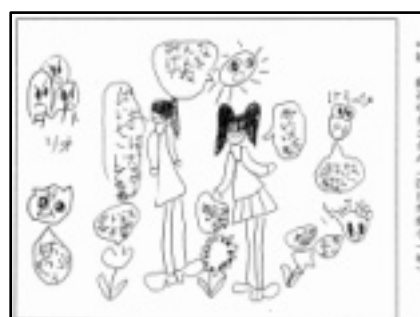
主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



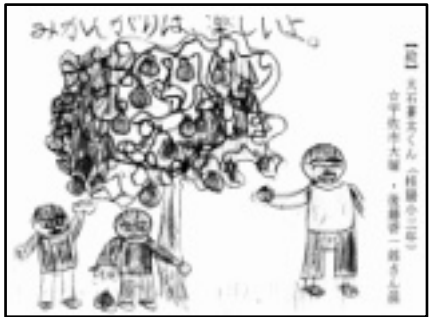
主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



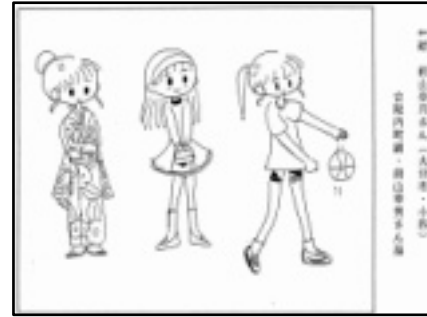
主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



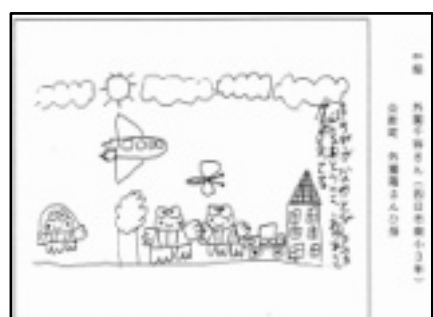
主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



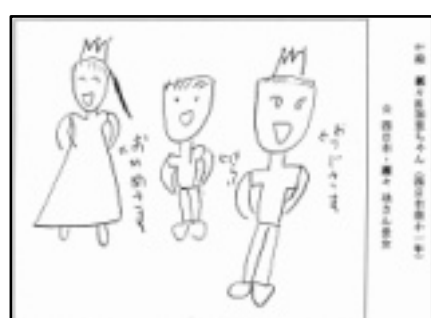
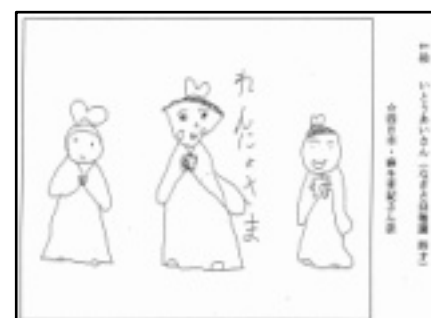
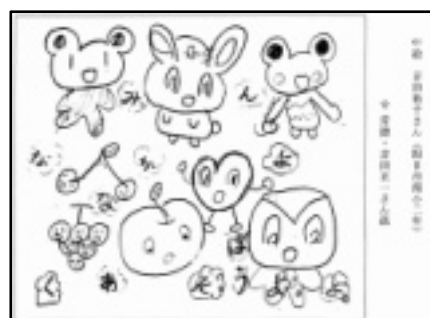
主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



主眼 児童会から（国語科）
 小笠原、高橋、山本、山本



心に響く良き言葉を選んで、ご門徒の皆さんに書いていただきました。今はお浄土へ還られた懐かしき人の名が散見されます。

佛法は
人何んが能く
おうとをわく
今何のものを
おうとをある

（今日の掲示板）

一言堂 金子大栄先生

▼書 中園令子さん（俳句）

光りおふ人に
ひかりはなかりけり
光りなき人
ひかりをあわぐ

（今日の掲示板）

一言堂 藤原真実先生

▼書 渡辺信雄さん

称名か
うれしき吐息
鳥に秋に
草木にかよふ
息とかや

（今日の掲示板）

一言堂 藤田清山園（詩集「おはつ抄」より）

▼書 大野アツ子さん（俳句）

失敗も
成功も
どちらでも頂戴できる
何ものか
感得できないか

（今日の掲示板）

一言堂 坂本忠志先生

合書 星川敬典さん（上旬）

衆生かわや
生死の海に
おのが罪から
浮き泳ぎ

（今日の掲示板）

一言堂 徳山実吉先生

▼書 矢野まづ子さん

ぼったよ
一本の筆をたてはとて
身をかくした
その安心をわたり
わけてふれないか

（今日の掲示板）

一言 八木重吉

合書 榎本スエノ（俳句）

一期一会
みんな
かなしく
なつかしく

今日の掲示板

一言堂 木村真樹さん、ふん持おしろう

合書 中園 吉子（俳句）

あおむけに
仔犬寝ころぶ
日向かな

（今日の掲示板）

一言堂 徳山実吉先生

合書 榎本千之さん（中園）

仏法は
明瞭と申すまは
あましく候
仏法のこころは
急げ急げ

（今日の掲示板）

一言堂 渡辺上人

合書 中園ハツ子さん（俳句）

自分を待む
人は人を おかめない
それは
自分を待めないで
人は人を
とかめ あいしている
それは
自分を待めないからだ

今日の掲示板

一言堂 坂本忠志先生

合書 渡辺 敬明（俳句）

いぐさじや
ただねんぶつ
ほかはなく

（今日の掲示板）

一言堂 木村真樹先生

▼書 渡辺文生さん（上旬）

ただ念仏
のみぞ
まことにて
おはします

（今日の掲示板）

一言堂 般若聖人

合書 渡辺一英さん（俳句）

おれさま
おれが踏みはなつて
踏みなつて
つぎへつて
へばとけさけさ
決して
おれは
おれさま

今日の掲示板

一言堂 吉田孝子（俳句）

（上旬）

白と秋や
人ハみえやう
月日奥く

「言葉」 江沢かすみさん

立書 柳きつきさん（清田市・清田）

あゝ 空気が
おいしい
空気にお礼を
申しましょう

「言葉」 柳原徳恵先生

立字 月本フサエさん（四日市・石田）

ある夜のゆめ

無量の縁に手を合せながら
いつのまにか
秋の谷底をあるいてより
ふと仰ぐ 遠い星の
なさんとこころしみるこころ

「詩」 橋本実一さん

立書 岡内明子・岡野陽子さん

わたしの言つことは
あくまで 信念を
なんでも
あきらめず 限り
一仏てんか官系を
間けて下さいー

「言葉」 安部夏己先生

立書 佐藤陽子

無量無数の祖先が
私達を身の中へ心に
生きている
そして
どうの助けてくれ
そと 私を助けてくれ
みんな願っている

「言葉」 高田豊彦先生

立書 丸岡とつ子さん

天地開闢

たままた人間に生まれ
久遠劫よりの生死海に
なむあみだぶつ
眼が開き

「詩」 橋本実一さん

立書 山本・山本・山本さん

盲目にわけて
もめいも 色あかし
今日もまた 来月まで
全かきかて

「言葉」 著 加藤道子さん

考ううい
考ううい
考ううい
考ううい

立字 別府・林 陽子さん

後光

私か一主成
傷だらけであるが
この傷から
一みじみとふかふか
後光がさしてくる

「詩」 橋本実一さん

立書 山本・山本・山本さん

子供の眼は輝いている
そして 真正面から人の顔を見る
いかに大人はその心を養って
まことに人を思ひつくる
特に自分と一番近く知っている人の顔を
見るときは 真正面に見ること
それが 教育であり 徳である

「言葉」 佐田四郎先生

立字 渡辺陽子さん（今期）

布を織る
糸はあとりり
老職人
かの上をたぐり糸にし
海苔とよこ糸にし
ふしぎな布を織っている

「詩」 橋本実一さん

立書 新井明・渡辺陽子さん

まの葉

秋の葉は 葉がふりつたり
葉がふりつたり
葉がふりつたり
葉がふりつたり
葉がふりつたり
葉がふりつたり

「詩」 橋本実一さん

立書 柳陽子・柳陽子さん

花を支えろ枝
枝を支えろ枝
幹を支えろ枝
幹を支えろ枝
幹を支えろ枝
幹を支えろ枝

「言葉」 岡本清美さん（別府）

下根の両手
今もまたこの両手
一切を南無観世音菩薩
にまかせよう
下根の両手が
それだけである

「詩」 橋本実一さん

立書 佐藤陽子・柳陽子さん

わが生よ

一輪の花の
一輪の花の
一輪の花の
一輪の花の
一輪の花の
一輪の花の

「詩」 岡本清美さん

立書 岡本清美さん

– 109 –

ひぐらしや ただねんぶつ ほかはなく

(今月の掲示版)

一言葉 木村無相先生

▼ 書 渡辺貞子さん (上町)

ひぐらしや

ただねんぶつ

ほかはなし

(法語カレンダーより)

渡辺貞子 (上町)

木村先生のこの言葉は、ただ私一人に聞かされたのであります。

私が十八才か十九才の頃であります。母といつものようにお寺参りをしておると、父が「お寺へ参るのは良いが、いくらお参りを重ねても、聞くところを聞かねば何の役にも立たないよ」と言われました。その時の私は、ただ南無阿弥陀仏を唱うれば浄土に生まれるのである、とおもっているぐらいでした。

父はまた「人間、誰にでも仏様はござるのであるから、誰に会っても南無阿弥陀仏で拝むの

ですよ」と言われました。

それから六十年も過ぎた今日、私はそれが解っているのであらうか……。ただ恥ずかしいばかりであります。この「響流」をご縁として、南無阿弥陀仏の日暮らしをさせていただきたいと思ひます。

(『響流』7号)

弔 辞

勝福寺坊守 藤谷純子

サダ子さん、九十七年間のこの世のいのちを終えられて、いよいよお浄土へお帰りになる時を迎えましたね。

昨日お母さん(前坊守)も、乗り物酔いがひどくてどこへも出かけないサダ子さんが聞法会やご本山へはよく出かけたことを、なつかしうに話していました。お元気だった頃のお姿には、私は長くは出会っていないので短いご縁でしたが、私がサダ子さんと出会って思うところを少し述べさせていただきます。

この二十三日、住職と一緒に見舞いに伺った時、知道さんが何回も何回も「サダ子さん、おばちゃん、知道だよ、わかるかい」と呼びかけるたび、おばちゃんはその都度その都度頷いておられました。しばらくおって「サダ子さん、おやすみなさい」「おやすみなさい」と声をかけて帰ってきたのです。私も最後のお別れのつもりでした。

知道さんは「両親との関係だけだったら、オレは寺に帰らなかつたらうな。サダ子さん達が

待ってくれていたから帰ったんだと思うよ」とよく言います。お寺とご門徒のふしぎなあたたかい結びつき、ここには阿弥陀さまがおられるんだと思ひます。

お寺を心の実家とし、阿弥陀様を心の親さまとして、自分のお里に帰るように陰に陽にお寺にご奉仕して下さいました。そういうお方が、私が来てもからでも、もうお浄土に帰られたミツルさん、ミスエさん、シズカさん、ヲソヨさん、森さん……上町に大勢おられました。

お寺へ来れば、同じ生活の苦労話や料理の作り方、漬物をもちよつたり、お寺のお手伝いが身についているおばちゃん達に、寺は支えられてきたのです。おばちゃん達から、難しい聖典の言葉は聞いたことがないけれど、いつだったか知道さんが「サダ子さんの合掌の姿は美しいな」と言ったことがありましたが、そのように阿弥陀様のお心を身に受けて、身を低くして生きておられました。教えを頭で覚えたり、自分の手の中ににぎりこむのでなくて、体にしみこませて一生懸命働いておられました。お寺を心の拠りどころとしておられたのでしよう。私はそういうお寺にどんな姿で住まわせてもらっているのか、サダ子さんたちに問われるような気がします。サダ子さんの鏡には、慣れては手ですることも足でするというように、ずいぶん高上がっている私が映し出されてきます。

サダ子さんからは、坊守はこうであらねばなどと注文めいたことは聞いたことはありませんが、ただ一つ私にたのむように仰つたことがあ

りました。それは、いついってもお内仏を美佐子さんがきれいに飾ってくれてるのでありがたいと言ったあとで、「奥さん、美佐子をお寺に参るようにして下さい。お願いします」と言われたのです。自分たちの老後のこととか、渡辺家のことを心配したりするのでなく、そう言われたその言葉は、私の胸に深く包み込まれていて忘れられない言葉でした。嫁に対する姑のお慈悲のようなものを私は感じました。こういうお心がお寺を次の世代につないで下さっているのだと思います。

今日は、サダ子さんの私達への厚い念いをしっかり受け止め直して、私もそれに育てられてゆきたいと念うことです。

サダ子さん、長い間念じつづけて下さってありがとうございました。

お浄土から時々還ってきて、私たちを叱咤激励して下さい。お願いいたします。

南無阿弥陀仏

平成二十一年十一月二十六日

(『響流』72号)

わが家のお内仏

幡手 スエノ (新町)

南無阿弥陀仏

お内仏の前に座りますと、ありし日の正遠先生のやさしい温顔とお姿が眼に浮かびます。

丁度、昨年の今頃でございました。五月に亡夫の五十回忌をお勤めするので、安部一心堂さんにお仏壇の彩色をお願いいたしました。しかし、小さなお内仏ですので仏さまはどうしようかと迷っていたところ、坊守さんより、別府鉄輪の原さん方の「あやくもの会」に藤原正遠先生、利枝先生がおいで下さるので、その時、先生にお願いしたらと言われ、まるで夢のようなお話でした。

あの日、先生は大分お疲れのご様子で、申し訳ないと思いましたが、日時も迫っていましたので、厚かましくお願いいたしました。お蔭様で、うちのお内仏はお名号、十字名号、九字名号と三幅とも正遠先生の直筆で、私の宝物でございます。

去る一月二十八日の同朋会は、小雪が舞う寒い夜でしたが、暖かいお迎えを頂きもったいないことでした。お内仏の正面に「彩雲院釈正遠」の法名がかけられ、右手には先生のお歌の書かれた屏風が立てられ、皆で、心をこめて『阿弥陀経』を頂きました。

また、正遠先生から何十年とお育てを頂いた別府の五十嵐さんが、報恩の感話をして下さいました。それはそれはおごそかで、小人数ですが大きな大きなご法事でした。

「四分、六分のお話」「何事も大法界の仏さまのお仕事」「計らいのない南無阿弥陀仏」、数々の先生のお育てをしつかり頂いていきます。

南無阿弥陀仏

(『響流』40号)



渡邊昌敏さん(上町)が勝福寺の山号「響流山」を伐採された別院の桜の木に彫ってくれました。



住職手作りの愛着深き掲示板も20余年を経ていいに朽ちました。今度は日田の鍛冶谷榮さんが本職の腕を発揮して製作し、ご寄贈下さいました。

『響流』77号 (2015年1月号)

『響流』73号 (2011年1月号)

「ひびき」

そして、まず、寺報の名をみんなに親しんでいただけるように、「響流」から「ひびき」へ変更することにしました。

それから内容について話し合った結果、巻頭言、企画物の「ご門徒さんこんにちは」、お彼岸や報恩講の様子や法話のまとめ、総代会の報告、仏事の知識、勝福寺の諸活動、生活の豆知識などで構成することにしました。最近では「勝福寺の今後のあり方等について」のアンケート集計結果を載せたりしています。

しかし九十二号からは、印刷を外注に出すようになり、刷り上がりがともきれいになりました。

さて今後の「ひびき」ですが、九十号に「勝福寺の今後のあり方等について」のアンケート結果を載せました。

* 次頁よりアンケート結果を載せた「ひびき90号」を収録しておきます。

合掌 なまんだぶつ

屋山童花ちゃんとおししちゃん

「響流」が「ひびき」に変わりました

住職 釋知道

そこにに行けば人が懐かしくなり、そこに座ると心が軽くなる、そんなお寺となりますように。

私の中に属くうわがままな心。一不平不調を募らせ、時には鬼にもなるわがままな心。そんなわがままな心に振り回されたいです。も道徳を信を事に疑いていく。そんなお寺となりますように。

生まれたことを慶び、力強く家庭を営み、
 寒い日々を乗りこえ、死んでいく日を両
 手でいたぐ、深い智慧を学んでいけるふ
 うな、そんなお寺となりますように。

- 112 -

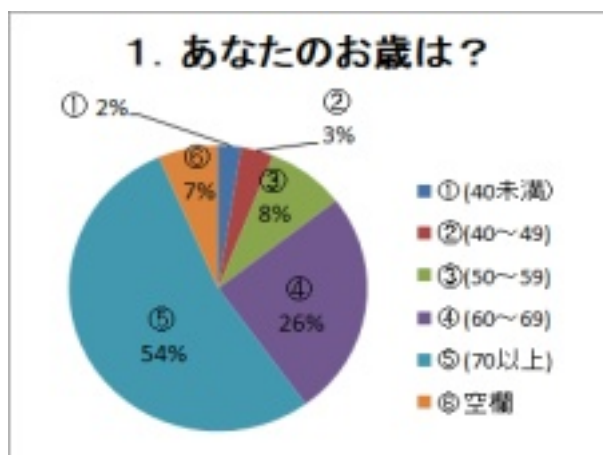
「勝福寺の今後のあり方等について」アンケート集計結果

皆さんに書いていただいたアンケートを「勝福寺・親鸞聖人七百五十回御遠忌委員会」が中心になって分析し、以下のようにまとめました。ご一読下さい。

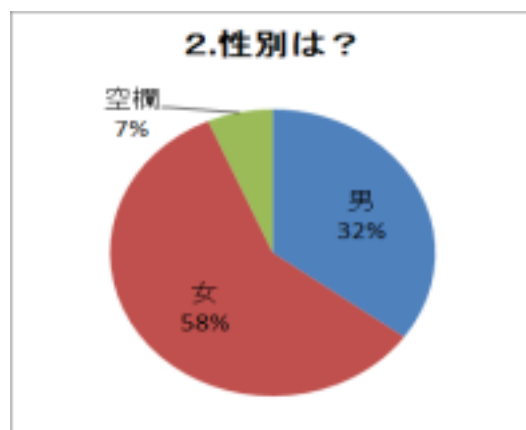
<全般的なまとめ>

配布世帯190に対して回収世帯150（回収枚数209）で、世帯単位の回収率は、79%でした。アンケートの個別項目の集計状況は、グラフに掲げているとおりです。

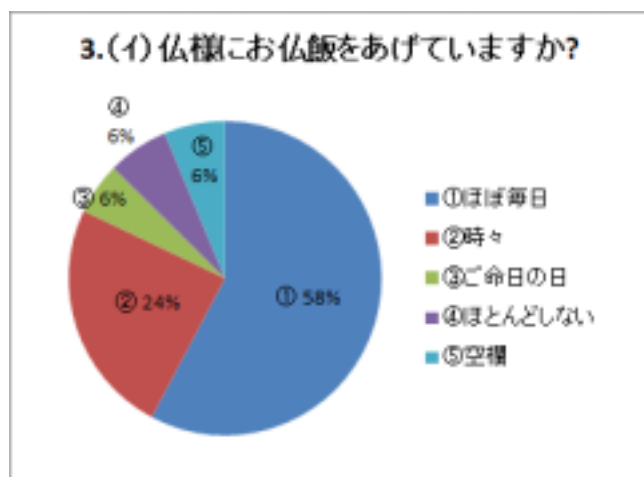
記述式の質問についても多数の回答が寄せられていますが、紙面の関係ですべてを記載することができませんので、グラフの後に整理要約して記載しています。



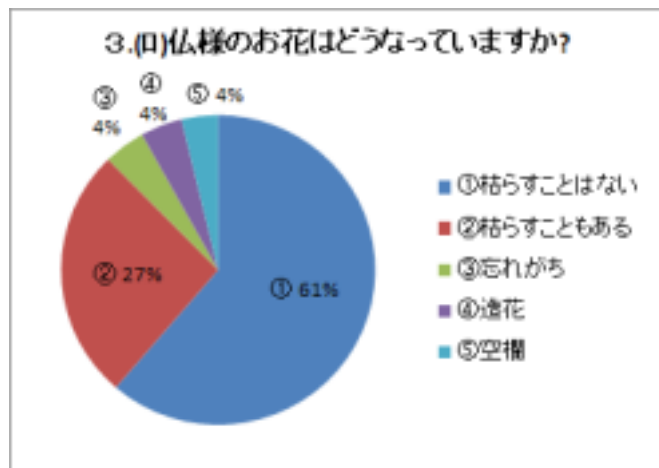
回答して下さった方の80%が60歳以上で、60歳未満は13%でした。社会の平均以上に高齢化率が高いのは、若い人の多くはお仏壇（お内仏）のある家を出て、お寺に繋がりのあるのはお年寄りの世帯となってしまうことの現れのようなようです。



女性の数が男性の約2倍となっています。これは女性の平均寿命が約6歳長いことと、一般的に、結婚時に女性の方が年下であることなどが理由として考えられます。また、仏さまのことは「奥さん任せ」になっている家庭もあるようで、そうしたことも関係しているかあかもしれません。

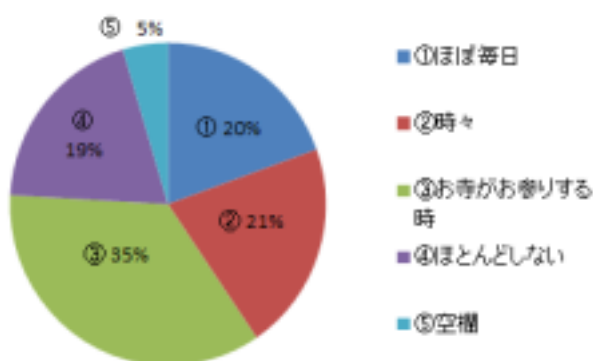


ほぼ毎日あげている人が約6割もいるというのは嬉しい驚きでした。現在は、ご飯も毎日炊かない家も増えているのではないかと思います、その中でほぼ毎日あげているということは、お内仏を大事にされている人が多いという事なのでしょう。



お花も多くの方が枯らすことなくあげられていました。忙しい日々、というっかりということもありますが、お内仏は浄土の世界をあらわしたものです。お花は生き生きとした状態を保つよう心がけたいですね。

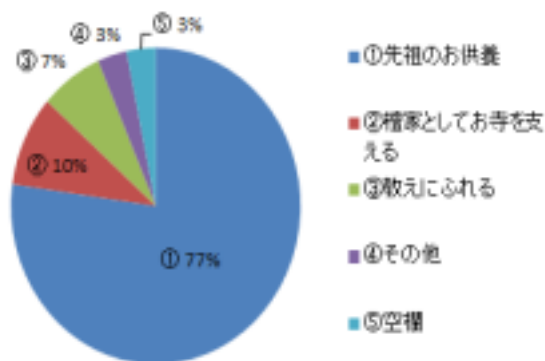
3. (ハ)ご仏前でお経をあげることがありますか？



「ほぼ毎日」お経をあげておられる方が20分もおられたことにビックリしました。また「時々」と「お寺がお参りする時」を併せると76%、4分の3の人が、ご仏前に手を合わせてお勤めをされています。ありがたいですね。

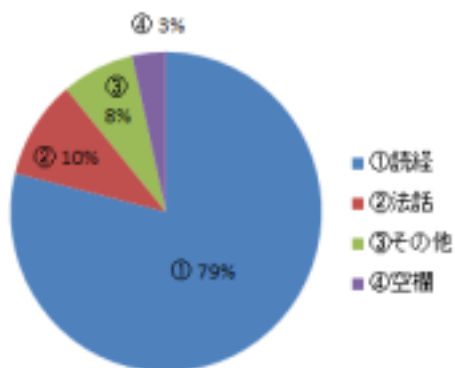
仏さまに掌を合わすだけでなく、お経をあげるといふ、そうしたゆったりとした時間をもつことが人生を深く豊にしてくださることでしょう。

4.(イ)月忌参りの意味をどう考えますか？



月忌参りですから先祖のお供養が第一になるのは当然でしょうね。それから10分の方が、そのお布施でお寺を支えているとお考え下さっていました。また7分の方ですが、教えにふれることも月忌参りの意味と考えられています。複数回答にしていたら、②や③の回答がもっとあったかもしれません。お月忌には、①②③の三つの意味が含まれていると思います。

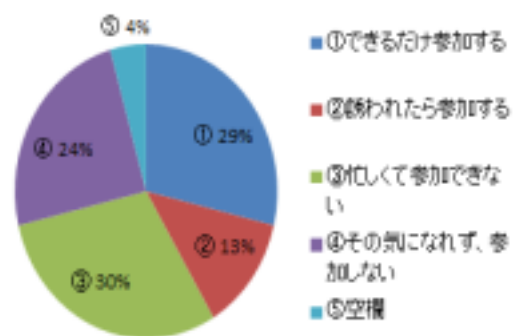
4. (ロ)どういう形が望ましいですか？



前の回答と関連しており、先祖の供養のために読経を、教えにふれるために法話を望んでいると思われます。月に一度、お寺さんと対面できる機会ですから、世間のこと、自分のこと、家族のこと、時期に応じたお話を聞けるといいですね。

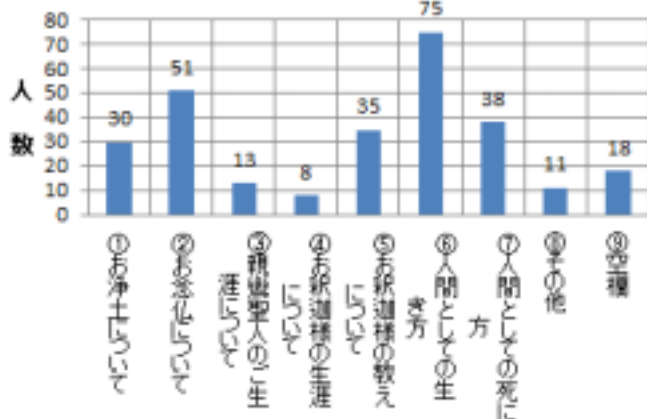


5. 聞法会を開くことにしていますが、参加されますか？



「できるだけ参加する」と回答された方が29分いました。回答枚数が209ですから「できるだけ参加する」人が約60人となります。②の「誘われたら参加する」人も30人弱になるかと思います。現在の参加者が大体50～60人程度ですので、まだ、誘いを待っている人がいらっしゃるのかもしれませんが、お互いに誘い合っていきましょう。

6. 聞法会ではどんな内容のものを望まれますか？

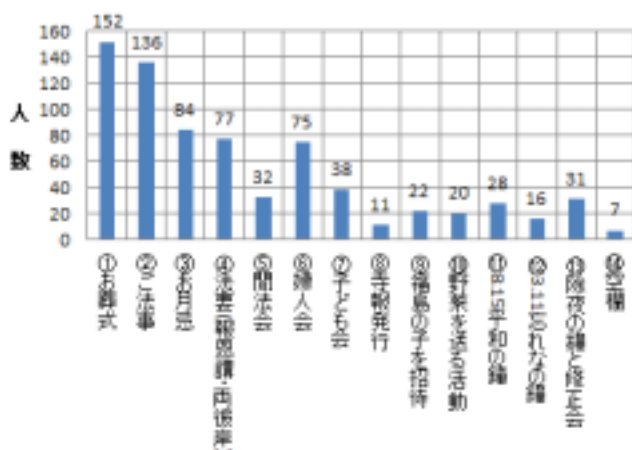


この問は複数回答していただきました。

「人間としての生き方」をあげた人が75人おり、一番多くいました。「人間としての死に方」の38人と合わせ、仏教に、生き死にの拠り所（よりどころ）を求められていることを感じます。

「お釈迦さま」（35+8人）「親鸞聖人」（13人）は、生き死にの拠り所として「お念仏について」（51人）「お浄土について」（30人）教えて下さっています。一つに繋がっていくといいですね。

8. 皆さんにとって大切だと思う項目は？

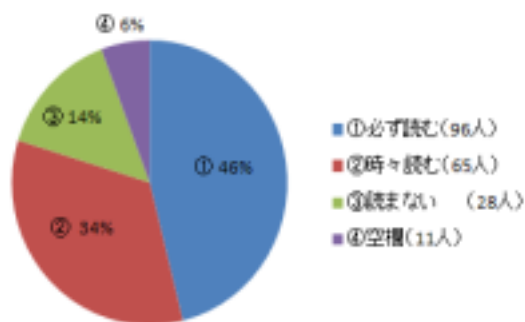


これも複数回答していただきました。ご門徒さんにとって、「お葬式」「ご法事」「お月忌」が大切なのは当然だと思いますが、次に多いのが「法要」となっており、報恩講や彼岸会での法話などを楽しみにしている門徒さんの多いことを改めて知らされました。

また、婦人会活動、子ども会活動にも賛同をいただいております。

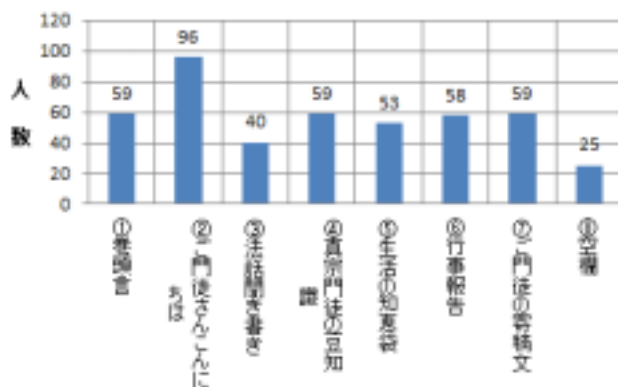
そのほか、お寺で取り組んでいる様々な活動にも、一定程度のご賛同をいただきました。

11.(イ)「ひびき」を読まれていますか？



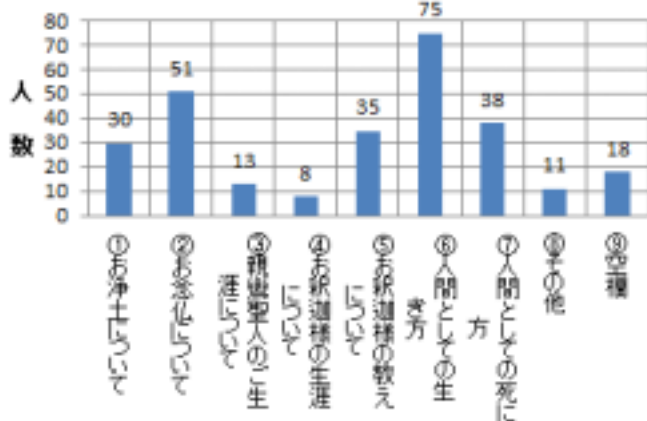
「必ず読む」と「時々読む」を併せると80%の人が読まれており、門徒さんの中に定着してきているようです。
これからも皆さんから愛される紙面づくりをしていきたいと思います。

11.(ロ)どの記事を読まれますか？



これも複数回答していただきました。読まれている記事では、「ご門徒さんこんにちは」が断トツに多く96人でした。「法話聞き書き」が40人と少ないのは、活字ではわかりにくいからでしょうか。あるいは、法要にお参りされなかった方にはあまり読まれていないという事でしょうか。その他の記事はどれも60人弱の人が読まれており、これからも続けていこうと思います。

6. 聞法会ではどんな内容のものを望まれますか？

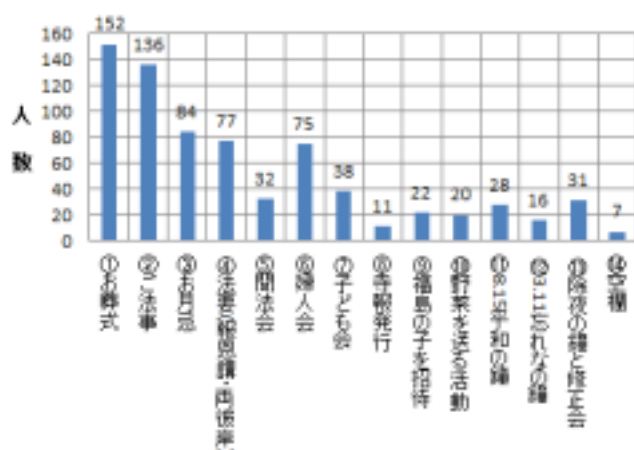


この間は複数回答していただきました。

「人間としての生き方」をあげた人が75人おり、一番多くいました。「人間としての死に方」の38人と合わせ、仏教に、生き死にの拠り所（よりどころ）を求められていることを感じます。

「お釈迦さま」（35+8人）「親鸞聖人」（13人）は、生き死にの拠り所として「お念仏について」（51人）「お浄土について」（30人）教えて下さっています。一つに繋がっていくといいですね。

8. 皆さんにとって大切だと思う項目は？

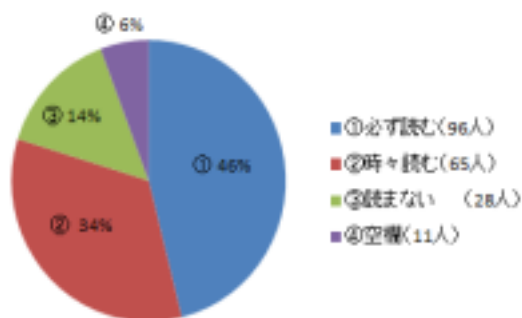


これも複数回答していただきました。ご門徒さんにとって、「お葬式」「ご法事」「お月忌」が大切なのは当然だと思いますが、次に多いのが「法要」となっており、報恩講や彼岸会での法話などを楽しみにしている門徒さんの多いことを改めて知らされました。

また、婦人会活動、子ども会活動にも賛同をいただいております。

そのほか、お寺で取り組んでいる様々な活動にも、一定程度のご賛同をいただきました。

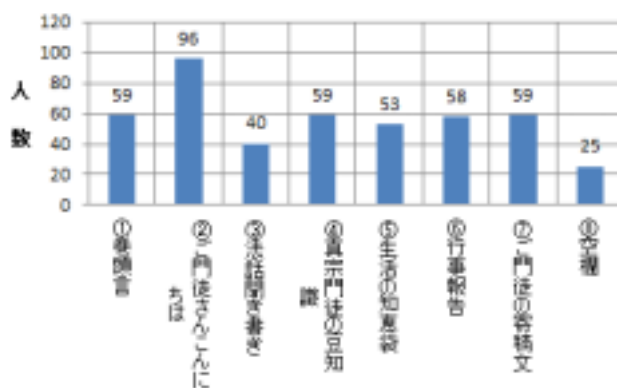
11.(イ)「ひびき」を読まれていますか？



「必ず読む」と「時々読む」を併せると80%の人が読まれており、門徒さんの中に定着してきているようです。

これからも皆さんから愛される紙面づくりをしていきたいと思います。

11.(ロ)どの記事を読まれますか？



これも複数回答していただきました。読まれている記事では、「ご門徒さんこんにちは」が断トツに多く96人でした。「法話聞き書き」が40人と少ないのは、活字ではわかりにくいからでしょうか。あるいは、法要にお参りされなかった方にはあまり読まれていないという事でしょうか。その他の記事はどれも60人弱の人が読まれており、これからも続けていこうと思います。

「ひびき」82号にのった「ご門徒さんにこんにちは!」です。

ご門徒さん

こんにちは! 第四回

私は大正十四年十一月の生まれですから、今九十才と三ヶ月です。私にとつてお念仏のご縁を下さったのは母の母であるお婆さんでした。お婆さんは明治元年の生まれで、子供のいない大家(おおいえ)の家へ十五才の時に養女に入り、やがて婿養子を迎えて十六才で私の母を産んだんです。次々生まれた四人の子が全部女で、肩身の狭い思いをし、自分の時代がなかったと言っていました。そんな苦勞がお念仏の道に入るご縁だったようです。

お手次寺は正行寺でした。が遠かったので蠣瀬(かきぜ)にあるお西のお寺さまへお朝事に参っていました。家でも毎朝ご飯の前に、お婆さんがお正信偈をあげ、その後母に兄・姉・私・弟が並んでお参りしました。最後に、

*何の不足も今日一日は、

私は言わずににこにここと。
*人に対して今日一日を、私は笑顔で親切に。
*仏に抱かれて今日一日も、私は往きますお浄土に。と唱えるんです。弟が「私

生き死には

お経機のお響きの中で

外園 治子 (中津)

れていましたので、お婆さんが毎朝お湯でのぼしてと、かしてくれて「お前は何かでこんなんじやろう。心の素直な子になれよ」と言われて、本当に可愛がられました。

小学校四年の時にこんなことがありました。お客僧様が風邪で来られないことになって、代わりに高座の横にイスとテーブルを置いて、父が親鸞様のお得度の

じやったろ」って言われたものです。
お婆さんはいつも独言(ひとりごと)のように「ナマンドブ ナマンドブ」と申していました。怒ることのない人でしたが、あまり笑わなかった気がします。私はぎこちなく「ナマンドブ」と言っていたのですが、この頃は「ナマンドブ ナマンドブ」とお婆さんに似てきました。父はとてもワンマンな人で母は苦勞しましたね。友人七人で「読経会」を作り、毎月第三日曜日の朝、各家を回り、



「仏説阿彌陀經」をあげて、その家でみそ汁と漬物の朝食をいただくことをしていました。それでお経様が私の耳に入っています。身についてるんですね。

は往きますお浄土に、私は往きますお浄土に」と繰返すと、お婆さんが「お前はいい子じや」とほめるんです。すよね。それからご飯をいただくんですが、毎朝お精進で、だしも昆布でとっていました。私はずっとそれがあたり前だと思っていましたよ。

兄や姉が優秀で、私はケタはずれに変わっていたようです。頭の毛は赤くちぢぬものか、は親鸞様はこう

ルでない、治は自分をおさめるということだ。自分の意志をしっかりとって付和雷同するなよ、これが父の教えでした。私が二十才の時に父を看取りました。母も養子とりでしたので「どんな苦しいことがあっても帰るところがない。でもお念仏を称えれば心が安まる」って泣いていましたね。父の看病をしながらお三部經を写経して綴本にしていきました。そんな母は九十才で亡くなりましたが、最後に「お念仏が出ん」と嘆きました。でもいつの間にかお念仏申してるので「お念仏が出るとるじゃない」と言ったら「あゝよかった」と言って、それが最後でした。私は父母、そして義父母、再婚してその義父母に義弟妹、それに夫と、何人も看取りました。これも何かのご縁です。

(聞き書き 藤谷 純子)

かざはな通信

仏法聴聞へのおさそいは、まるで風が舞い散る花びらをいずこへともなく運んでいくように、そんな感じで、誰からともなく、誰へともなく、…… 如来さまのはかしい、お仕事、……そんな気持ちで月に一度お手元に届けさせていただきます。

酒井正知先生の「ともしび通信」をまねて「かざはな(風花)通信」と名づけてみました。お受け取りください。

百日聴聞会の後、しばらくお休みしておりましたが、そろそろ再会しようということになりました。お互いの生死を見つめ、実りある人生を遂げられますよう、仏法聴聞を続けてゆきましよう。

こんな言葉が始まる「かざはな通信」が坊守によって、平成二十四(二〇一二)年五月から毎月出されるようになりました。令和元年(二〇一九年)十月現在、84号となっています。

なお、宇佐市高家の円徳寺前住職の酒井正知先生の「ともしび通信」は、昭和五十七年四月に始まり、平成二十一年十一月号まで、三百号の長きにわたって続けられました。

酒井先生は令和元年七月十三日に満九十九歳でお浄土へお還りになりました。



かざはな通信 No.79

や、と見つけるとは 別のもつを見失い、行ったり来たり、オロオロウロウロしつつ こんな私になっていることに戸惑い かくりしつつ、それども自分の頭をなめて「おまををききとくからね」と高おうとした時、もう一つの別な声が重なるひびいてきた。形めなむない、いのちの意を「法蔵菩薩の声だ!」と聞きとれたらんに 涙があふれてきた。

この頃 私の中には二つに分かれ、しくじり自分ともの相争いになりながらなわめたり 祈りたりする自分とが いるのである。その二つに分かれた私の もっと底から湧き上がってきた「お前をききとく!」と言ってくれた声に 一瞬 身も心も熱くなった。

「ききよ! ききよ!」「ききんかな ききんかな」
共鳴現象 いろいろのせうりか、不思議な体験であった。 南無阿彌陀仏

然らぬ 声を 聞きつつ ききんかな

○ご意見お待たせ聞法会 5月11日PM1.30
「心理から 真理へ」

白々海 真(じま しん)先生

新緑まぶしい五月 聴聞に参りて下さい。



かざはな通信 No.2

望の季節になると思ひ出される詩があります。

祖母

祖母は 望をかきあつめて
桃の実のように 合せた掌の中から
沢山の望を くれるのだ

祖母は 月光をかきあつめて
桃の実のように 合せた掌の中から
沢山の月光を くれるのだ (三好達治)

望も月光も 闇を ほの照らすもの。そして母よりも祖母へ さらにそと彼方、私たちのいのちの はるかな はるかな 記憶の彼方に ましました 一番はじめの仏様の名前が 慈光(じこう)と来るとも 燃灯(ねんとう)と来るとも いうのだと うとす。 いのちの はじめを 明よく 照らす くれた 光の 歩みか 今、ここに「南無阿彌陀仏 ナンメンブツ」と刻り 属せられているのです。オリンピックの 聖火リレーのように 人から人へと 手渡され、受け継がれてきたのです。

「御名を聞く会」6月28日(木)1時半より
おまじりをおねがいいたします。

お便り

伊東正子(北海道)

純子さん、私この頃思うことがあつたのです。

「かざはな通信」など送っていただいたことで、仏様の心が長い年月をかけて、私の、頭ばかり大きく傲慢な心に、雨の滴くのように染み込んでくださっているのを実感することがあるのです。

何事も疑いの強い私は、人様のことを疑っているの で心が晴れず、仏様の存在までも忘れていたのです。自分勝手に自分の心に振り回されている時、「ああ、自分は間違っている。林先生や純子さんが私に伝えてくださったっているのは、仏様の世界なんだ」と心なだめて、また少しづつ生活させていただいております。

なまくらな私は、今日はお寺に行くのがおつくだと思つても、重い体がやはりお寺に行つてこようと動くので、自分でも不思議と思うことがあるのです。たくさん愛情をかけていただいて、合掌です。

勝福寺関係出版物一覧

題 名	著 者	刊 行 日	発 行 者	備 考
念仏申そう	細川 巖	一九九五年五月	勝福寺・手造	山を越える会報恩講法話
後生の一大事に心をかけて弥陀のため	松本 梶丸	一九九九年九月	勝福寺	蓮如上人五百回御遠忌法要記念法話 本堂庫裏改宗落慶法要記念法話
いのちの御物語	藤谷 知道	二〇〇〇年九月	勝福寺	
小さきは小さきままに	藤原 利枝	二〇〇一年十月	樹心社	藤谷純子編集
一里塚ー百日安居の記録ー		二〇〇二年十二月	勝福寺・手造	百日安居の会記録
一大不可思議の妙用に運ばれて	五十嵐 務	二〇〇三年十一月	勝福寺・手造	
助かる縁のなき身	五十嵐 務	二〇一一年六月	勝福寺・手造	五十嵐務師法話・追悼集
私の「如是我聞」		二〇一二年三月	勝福寺・手造	百日聴聞会・聴講者随想集
いのちの風光	藤谷 知道	二〇一二年七月	樹心社	
南無仏の御名なかりせば	藤谷 純子	二〇一二年八月	日豊教区	高倉会館・親鸞聖人讃仰講演会
念仏のうた	山本 ヒロ子	二〇一四年四月	勝福寺・手造	山本ヒロ子さん遺稿短歌集
念仏の光の中に	藤谷 純子	二〇一四年四月	東本願寺 CD	東本願寺ラジオ放送
愚禿釋親鸞ーその生涯と教えー 恵信尼公ーその生涯とお便りー	藤谷 知道	二〇一八年十月	勝福寺	響流山勝福寺 宗祖親鸞聖人七百五十回 御遠忌・テキスト